

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

第6回 現地会議 in 福島 速記録

【実施概要】

タイトル：第6回 現地会議 in 福島 ―復興の担い手と共に次の一步を考える―

日時：2013年6月21日（金）13:30～17:00

会場：南相馬市民文化会館 ゆめはっと 多目的ホール

（福島県南相馬市原町区本町二丁目28番地の1）

以下、敬称略

開会

開会の挨拶（山崎：JCN代表世話人）

「復興の担い手とともに次の一步を考える」を副題に、今回で6回目の現地会議となります。福島の方々は、会場におられる方々も、ご家族を亡くされた方、住む場所に戻れない方、色々な課題を抱えながら、この現地の皆さまと共に、次の一步を考えよう、次に何とか希望を見出そう、という懸命の努力をしていらっしゃると思います。今日この会議を進めるに当たりましては、ふくしま連携復興センターの皆さま、うつくしまNPOネットワークの皆さま、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の皆さまなどが共催になっておりますが、実際には今日おいでになっておられます JANIC の皆さまや、現地ですっと支えていらっしゃる皆様のご協力の中で、今日を迎える事が出来たと思っています。知る、学ぶ、つながるという3つのテーマで今回もさせていただきます。

南相馬の現地の中で色々な活動をしながらかんがえていらっしゃる事、怒っていらっしゃる事、なかなか前に進まず辛いのかんがえていらっしゃる方、なかなか道が見えないのかんがえていらっしゃる方、色々な思いが渦巻いていると思います。そうした事を私たちは共有して、共有するだけではなく一歩でも二歩でも前につなげていける、実際にはつなげていく道がよく見えないという思いの方もおられると思いますが、険しい道を歩み続けようというその思いを、今日は一つにして、特に子どもたちの事を考えていかなければなりません。

実際には、子どもたちがあと10年、20年経ったときにどうなるかという事も考えて、次の世代に私たち大人が果たすべき責任としての一歩を作っていくために、この会議が一里塚になる事を祈って、みなさん現地に集合して下さったと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

この厳しさを本当に共有できないもどかしさを一方で感じるわけですが、ここで亡くなってしまった人たちの事を私たちは絶対に忘れてはならない、その思いと一緒に背負っていこうよ、という、そういう決意表明の場でもあるのだと思います。それからNPO/NGO/ボランティア、あるいは住民の方、バラバラではなく、今日は接着剤の役割を果たして下さっている方もいらっしゃっています。支援をしている人を支援する立場にある方もいらっしゃいます。渦中の中で色々探っていらっしゃる方もいらっしゃいます。そうした皆さまの声を、今日は知り、そして学び、そしてつながりあう、その道を進みたい。

あまり長い時間ではありませんが、そのために皆さま色々な工夫をしてくださったのだと思います。本当に実りある時間にして参りたいと思ひながら、しかし空気を読みますと、「そう簡単ではないよね」と先に見える所もあります。ですが一歩でも二歩でも、私たちが歩める道を探るひと時になったらと思います。このご準備をいただきました皆さま、今日の司会をしてくださる日本ファシリテーション協会の皆さま、物心両面で支えて下さった皆様に、心からお礼を申し上げ、参加する皆さまと共に、実りのある時間となります。

ことを祈念いたしまして、開会のご挨拶に変えさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

情報提供（鈴木亮：JCN 福島現地駐在員）

JCN は岩手、宮城、福島に駐在員を 1 人ずつ配置し、地元の方・中間支援・広域避難者の訪問、ネットワークを築き、協議会に出させていただき、草の根の取組みを訪問させていただいています。そこで知り得た課題について、被災三県の担当者同士、あるいは広域で動いている団体同士、東京や西の方の支援を考えている団体の方々と月に 2 度、検討するような会を持ちつつ、3 か月に一度、このような現地会議を持たせていただいております。前は 3 月 12 日にいわきでやらせていただきました。浜通りの課題がまだまだ私たちにはわかっていないという事を痛感いたしまして、今回は南相馬市で開催させていたこうと、地元の方々に非常に丁寧に色々教えていただきまして、本日開催させていただく事になりました。ありがとうございます。

最初に復興の担い手の声ということで、南相馬市で活動されているそれぞれのお立場から、現状を語っていただきます。3 つの事例をお話いただきます。JCN の現地会議も南相馬で開催ということはとても感慨深いことですよ。まず、第 1 部は「知る」と題しまして、南相馬の現状を、地元南相馬で活動されている 3 名の方からお話を伺います。第 2 部では、その状況に対して少しでも次に進む一歩となるヒントを探り、第 3 部では皆さま一人一人が「今日はこういう事を得たくて来ました」という事を共有し、名刺交換をしてつながる事が出来る時間とできましたらと思います。なにとぞ有意義な一日となりますよう、お願い申し上げます。

【テーマ 1 「知る」】復興の担い手の声

南相馬市で活動されているそれぞれのお立場から、現状を語る

近藤 能之 氏（走れ南相馬 代表）

小さな任意団体として活動してきた。子育てをしている家庭の親の声を聞き、その交渉人のような事やってきた経験をお話したい。避難するのか、それとも現地で前向きに生きるのか。背中を押して欲しいのかどうか。「最終的には自分で決めなさい」と。前向きで生きる環境を作り出すことをテーマに動いてきた。南相馬ではいまだに除染が進んでいない。宅地の除染も予定では完了しているはずだが、始まっていない。保育園が除染をするとは何事か、という意見も多いが、ここに住んでいる家族のためにやっている。乳幼児宅の除染のサポートをしてきた。23 軒の除染を実施。安心感を創り出す活動をしているが、安心感は見えない。自分が動くことで、安心感になっている。お母さん会議、お父さん会議をプロデュースしてきた。別々に。対話の場として。自分たちはどう動かなくっては行けないのか？ どう安心感を得るのかを見出すのか？ という結論を創出する。

外で遊ばせられないのは、子どもにとっても大人にとってもストレスとなる。大人同士のコミュニケーションはかれるところも必要。NPO 法人フローレンスさんにお声掛けしたり、署名集めをしている団体さんとつながり「これだけの声があります」と、市長に交渉したり、市長とフローレンスとの懇談会を企画したり、繋げながら実現化を図ってきた。ここにいる家族のためにやっていることが、住むことを助長しているのではないのか、様々な誹謗中傷を受けることもある。お役所を敵に回していいのか、南相馬に住むことを助長しているのではないのか、など。「そんな事ないですよ」とお話ししつつ、気にしないでやってきた。屋内が解決すると、今度は屋外を、という声が出てくる。色々な組織があっても、話し合っただけでなかなか進まないのだと父母にモヤモヤしている人がいて、「みんな共和国」という共同体を組織してスピード感をだした。「こどもが安心して遊べる場を作りたい」ということで、7 月にも市民でクリーン作戦をおこなう。

アンケートをとったら、「外遊びはまだ早い」という意見が半分。「外で遊ばせている」という人が25%。やろうと決まったとしても実現が遅いと人が離れてしまうという結果になってしまう。それでは女性と子どもが居なくなってしまう町になってしまうので、スピード感を持って作り上げることをモットー。ぜひ高見公園に行って、遊んでみてください。隣に道の駅があり、仮設住宅もあり、落ち込んでいる大人の人も遊べるようになってきている。毎朝、ラジオ体操も行っている。自分の目で安心を感じるきっかけづくりにも。避難している人にも「南相馬が変わっている。安心が生まれている」というメッセージになる。

安心の論議は正しいかわからない。しかし目的は安心感をつくり出すこと。それは自分たちでできる事。行政には依存せずにフォローを求める。「やっていますか？」と提案していく。初動から行政と一緒にやろうとお願いしても動けない、と割り切っている。折り合いをつける。それが信頼や連携につながる。

水が南相馬は危険だと言われることがある。「そんなことないよ」と日本全国の方から応援していただいて、『じゃぶじゃぶ池』という安心して遊べる水場を作っている。「水はすごく危ない」と言われる事もあり、安心して水遊びできる所を作りたかった。避難した人と地元に残った人で温度差があるという現実がある。自分が起こしたアクションはどちらも正しいと思いたい、しかしどちらの選択も正しいということではないか。南相馬に戻りたいと思った人にも、戻ってみたら前よりもよい南相馬になっているように…と活動している。ぜひ足を運び、こういう動きがあるのだ、と広く発信していただきたい。お願いします。

栗田

とどまるという選択をしたからには、どう安心を生み出していくかという立場で活動されている。色々なアイデアを実現している。その次は何を？

近藤

人が住んでいくコミュニティには、医療や文化、教育の充実が必要。お母さん方は、シビアにそういう充実を求めている。公園にはアートや文化の要素がまだ足りないので作っていききたい。

栗田

南相馬が住みたくなる町となる事を目指される。そうすると「戻る人の権利」の議論になる。私も愛知の方で、避難されている方の支援をしているが、そういう方が「戻りたい」となった時に、温かく迎えていただけたらと思う。

近藤

南相馬に残るかどうかが、自分に委ねられている事が難しさを生み出している。行政からの指示ではなく。避難している人も、残っている人も、正しい選択なのだと思うようであってほしい。戻ってきたくなくなった時も、震災前より良くなっている、といい。お母さんと子ども中心でやっていかないと、社会の基盤は変わっていかないので、課題は色々あるが、子育てというテーマから今日はお話しました。

原澤慶太郎 氏（南相馬市立総合病院 内科医師）

半分は南相馬の医療の現状、もう半分はひとりの若者としての意見を述べたい。ご存知の通り、南相馬市では原子力災害があり、今日は時間が15分という事で詳しくは話せないが、その後も色々な事が起きた。放射線が原因で病気になったという事は起こっておらず、例えば介護難民、医療崩壊、小中学生を中心とした差別などが起きている。健康診断の数値から生活習慣病も増えている。仮設住宅の人が悪くなっている。糖尿病、高血圧、高脂血症など。もう一つは補償の問題で、道一本隔てたコミュニティの崩壊が起きている。それが私たちの関わっている問題。だからと言って放射能が関係ないという話ではない。しかし実際の生活にすごくのしかかっている。放射能の話をするると1時間はかかる。

震災の年の9月における南相馬市のデータ。ホームページにも出ている。内部被ばくの問題に関して、ピークとして5~10Bq/kgで内部被ばくしているというデータが出ている。関西など日本中でも検査している。

「大変でしたね」と皆さん言われる。

しかし、中国、ロシア、インドなどが核実験していた1960年代はもっと日本全体で線量が高かった。ネイチャーという雑誌で、日本は福島の人より高い10~15/kgで被ばくしていたという報告がある。この時に日本中の人々が放射能の灰をかぶっている。福島県と福島県外の人とではかなり温度差があるというのは、福島原発の事故や被ばくがあたかも福島だけで起こったことだと思われている。しかし当時の人がこれだけ被ばくしていたという事実は、日本中の人々が知っていていいと思う。それから年間1ミリシーベルトという数字を新聞でよく見ると思う。食べ物の内部被ばくに関して、どれくらい食べたら年間1ミリシーベルトの被ばくになるか？それは350Bq/kgを食べ続けると至らない量。被ばくがあるかないか、ゼロか1かでいえば、被ばくしている。しかし毎日尿としても排出もされている。毎日イノシシでも食べ続けるほどでなければ、そうはならない。今の南相馬の人が経験した放射線量は、零点ゼロいくつ、という被ばく線量であることはぜひ知っておいていただきたい。南相馬の線量はレントゲンを1回とる5分の1から6分の1ほどそれでもダメという人は、レントゲンも撮れない。CTなんか絶対撮れない。1回撮るだけで、6~10ミリシーベルトを浴びる。僕ら医者も、患者さんについてはいるたびに被ばくはしている。放射線というのはそういうものであるという事を知っていただきたい。

皆さんに知っていただきたいのは、放射線では今すぐに死なない。私の患者は糖尿病や脳梗塞、うつで亡くなっている。そういったものにきちんと対応しなければ、命を落とす。当たり前のことだが、放射能の事はとても気になるので、他の病気に注意がおろそかになっている印象が否めない。啓蒙を引き続きしなければならぬ。

被ばくについてのポイントは3つ。継続的にホールボディカウンター検査を受けてください。南相馬市では学校検診にも取り組まれたから子供たちはきちんとできる。若い人にも声をかけている。お年寄りもちょっと間隔を空けてもいいかも。継続的な食品検査、これは非常に大事。検査を止めると汚染が紛れ込む。チェルノブイリの事故から何年かたって、内部被ばくがドンと増えた。なぜかというところ連が崩壊して検査体制が甘くなったから。きちんと自分の口に入る物を検査する事が重要。あとは除染、あるいは移住する。その3つ。

原子力災害の後は、コミュニティが高齢化する。その時に起こる様々な事態に、きちんと対応しないといけない。今回の災害を踏まえ、日本中で今後の原子力災害に対するシミュレーションもしないといけない。ニュースでも中国からPM2.5が飛んできた、という話もある。中国や朝鮮で今後原子力災害が起きた時、放射能が飛んでくる。その時にどういうアクションを起こすのか、議論が足りていないと思う。

在宅医療を去年作って、町の中で往診している。その名の通り、家まで行って、薬も出せば往診もする。特に家族の介護がない南相馬では、通院できない患者は多い。必要な医療。内訳は癌の人がすごく多い。癌の終末期が半分を超える。高齢化医療の特徴。人間が最後なくなる時は、癌か脳梗塞か肺炎。できれば家で死にたいという人は多いが、それは非常に大変。

訪問介護士もいればヘルパーもいるが、日本の在宅医療は家族の負担をものすごく強いる。特にお嫁さんと奥さん。介護者が疲れてしまい、最後は病院に行く人が半数以上いる。南相馬では4分の1が仮設住宅。祖父祖母をお嫁さんが世話している。1世帯数は2-3名。外来に来る人に調査すると、延命治療は望まない人が9割にものぼる。人工呼吸器や心臓マッサージの話をする、「何もしないで欲しい」という人がほとんど。これをどう考えるべきか、よく考えなければならない。厚生労働省が在宅への移行を呼び掛ける記事を見た人もいると思うが、私は無理だと考えている。甘いものではない。病院がサポートして看取れる体制を作っていかなければならない。孤独死という本があるが、阪神淡路の地震で多くの中老年の成人病患者が仮設住宅の中で亡くなっていた。南相馬でそういう事が起こらないように様々な人が取り組んでいる。

病院でも、ひきこもりの (H)、お父さんを (O)、ひきよせよう (H)、プロジェクト (P) = 「HOHP」という活動をしている。今、南相馬に何が必要か。農業漁業、生産業、色々な問題があり、医療も看護婦が集まらなくて本当に困っている。そこで暮らす人たちに生業があり、メシが食えるか、という事。夢のようなことに補助金を使っても、町は立ち上がれない。いずれ歴史の裁きを受ける。

ロボット産業、医療福祉・バイオ、そういったものでやっていくしかないと感じている。もっと言うと「子どもたちはどうなっているのか」に目を向けなければならない。アメリカの小学校の子どものうち、65%は、将来「今ない仕事」に就く。僕が小学生の時、携帯電話の会社も外資系の会社もなかった。今僕らが「子どもたちの将来」を考えても、とてもじゃないが想像できない世界が広がっているはず。何が出来るかという、そういう変化に対応できる子どもたちを、おそらく育てていかなければならない。医者をやっていると色々な人から話を聞く。南相馬で、まず何をしなければいけないか、それは「子どもたちの教育」。種まき。我々の世代ではできない事を子どもたちに託す。教育に関しては、誰もぶつからない。産業誘致や、医療の話だと、ぶつかる。今日持ち帰ってもらいたい言葉に「モンテッソーリ教育」がある。もともとは発達障害の子どもや、貧困層の子どもたちに提供される教育。ヨーロッパでは非常に高く評価されている。子供たちに、新しい問題解決能力を持った教育を、アフタースクールで提供する事も必要。

最後に苦言申し上げるが、南相馬に足りないものは、「チーム」。仲良い人とのお付き合いだけではなく、問題解決能力を備えたプロ集団。外から連れていてもいい。チームを作る時に、情報収集や問題設定が必要とか、そんな事は本に書いてある。一番必要なのは「この町を何とかしたい」というパッションだと思う。これがあればチームは出来る。その上で、お互いの弱点を補い合い、しかも意見の衝突を恐れず組めるかにかかっている。これがない、と思っている。南相馬にメンバーはそろっている。強い思いを持った人もたくさんいる。足りないのは「チーム」だと思う。問題解決に特化したチームを作る事が出来れば、南相馬は今後も発展できる。

田村早人 (社会福祉法人 南相馬市社会福祉協議会 事務局長)

今日いろんな方たちがきてるので、教えていただいたらありがたい。3月に群馬にいったが小高区の方がむこうで土地かって住んでいる。もう帰る気があるのか疑問。そういうことを考えると避難が長引けば南相馬に戻ってくる人がどんどん少なくなってしまう。

震災当時は、地震・津波が来るということで、住民を高台に避難させた。デイサービスセンターに一週間寝泊りした。12日に水素爆発が起こった。まさか爆発するとは思っていなかった。昔、電力会社勤めの方と、「もし原発が爆発したら、60Kmは逃げないといけないね」という話をしていた。蔵王のふもとだ。だから若い職員には「逃げなさい」と。若いお母さんは秋田や山形まで逃げた。残ったのは年配者だけ。体の弱い高齢者の方は一般の避難所では生活できない。そんな方々を集めて、新潟に避難するまで面倒見ていた。何もない。食料、乾麺、缶詰もない。知り合いのスーパーに残っていたものを分けていただいた。あるのはスパゲティとか。あとは皆さんが餅などを持ち寄った。市民は全員避難しなさいということを通達受けていたが、避難者も動揺するなと思ったので、一切言わなかった。その日の朝告げて、市が用意したバスで避難した。17~18日、職員も全員避難させた。原町が屋内待機区域であったが鹿島は最後まで残っていた。震災当時は無我夢中。

3月の末には職員も戻り、4月からボランティアセンターを立ち上げた。ボラセンの運営は、支援プロジェクト(支援P)の方が教えてくれた。はじめ「支援P」が何なのかわからなかった。「中央の支援している団体だよ」と、茨城県のお坊さんに教わった。気が張っている中、お酒を酌み交わしながら、一緒に作っていった。

資材がない中何ができるのか。と思っていたところ、新潟の災害ボラセンもスコップ100個と一輪車50台を送ってくれた。那須や埼玉からも資材提供受け、体制が整った。4月5~6日頃にはボランティアが30

名ほど集まるようになり、その中にプロの方が2人、土建関係の方、建設関係の監督さんがいたので協力してくれた。地元の若い21くらいの5人が、地元のためにとボランティアしていたので、そのプロの人たちが指導をしてくれた。がれきの撤去はプロの指導のもと、順調に進んでいった。8月頃にはひと段落した。30キロ圏外であったことも功を奏していた。

8月から仮設住宅ができ、避難者を入れなければいけなくなる。生活支援相談員を立ち上げる必要があり、当時12名を配属し、仮設を回った。相談員がうかがってもお叱りを受ける事が多かった。サロン運営も始まった。当時は鹿島にしか仮設なかったが、昨年からは原町にもできて、相談員は18名。復興住宅の建設は進んでおらず、仮設の方の将来への不安度は増している。不安感はぬぐえない。訪問とサロン、それだけでいいのか。つなぐだけでいいのか。心に寄り添うだけでは難しいと考えている、いろんな助言欲しい。避難生活が長引くと、帰ってくる人も少なくなる。小高区の方が2人、群馬にいるのを訪ねたが、もう土地を買って帰らないと言っておられた。本当に帰る気があるのか疑問である。今の状態が続けば続くほど、若い世帯は難しいと感じている。

震災後、南相馬は限界集落になったと言われている。それが復活できるのか、世界の注目だと言われたが、高齢者が主体。足腰も弱っているの、体操をしたりして何とか体力を落とさないように何とかやっている。もう少し発展させないといけない。智恵を貸してほしい。希望が持てないと、自殺している方もいる。そうした人を出さないような方法を考えないといけない。

栗田

非常に深厚なお話をいただいた。社協としてはそこから逃げられないので、向き合っていただくしかない。福祉というグレーゾーンの方が心配ですが？

田村

総合病院や精神科の病院とも連携している。職員が精神的にまいっている状況もある。地元の高齢者は体操をして足腰が弱らないようにしているが、出てこない人もいる。避難されている方の体力が落ちてしまう。希望が持てないと聞く、そういう状況なので、そういうひとを出さないためにも知恵をおききたい。

テーマ2「学ぶ」次の一步を考える

外部団体や県内で活動されているかたを交え、復興の担い手強化のための「次の一步」を話し合う

栗田

前段の「知る」から、様々な状況をお聞きしました。私のいる愛知でも知り得ない、忘れられていることだと思います。伝えて行かなければいけないと痛感しています。今日はメディアージさんにもご協力いただいて中継もしています。

後藤麻理子氏（NPO 法人 日本ボランティアコーディネーター協会 事務局長）

JVCAの後藤です。今日は東京から来ましたが、東日本大震災以降、福島市渡利に福島事務所を置いています。ボランティアコーディネーターってご存知ですか？

私たちは最初東京大阪でこれから向かう方に状況やニーズ、心得を行く前に災害ボランティアを考える集いをしました。GWに向けて準備、その後現地のボランティアセンターに応援で送りました。夏になって仮設住宅支援を。社会福祉協議会と一緒に支援員の研修や活動のサポートをしました。

生活支援相談員は何か？から具体的な実演など3日研修を5回行いました。生活支援相談員ハンドブックもつくりました。今年3月に配布した。理由は3つ。1 新任の相談員の方の基礎的な勉強のため。2 生活支援相談員の存在を知られていなかったため、周囲への理解と連携の相談の可能性をさぐる。3 既に活動を

していて良い活動をしている方のご紹介をする。もう2年くらいになるので、そのなかで良い活動をしているのを紹介するため。参考にも作成メンバーは県社協、災害支援のNPO、JVCAでつくりました。かなりいい反響だった。平常はそれぞれの市町村だったのが横断的に情報交換できるようになった。社協とNPOが話せるようになった。読んだ相談員からは「私の知りたいことが書いてある」と喜んでもらった。

生活支援相談員といっても避難を受け入れているところと、被災しているところとちょっと活動が違う。全戸訪問や重点訪問。じっくりはなしながら不安や悩みを聞く。集会所のサロンにも。サロンは顔見知りでないかたがであう。俳句とかやる。話して専門に繋がらないといけない場合は適切な機関に。あと隣近所見守りの体制をつくるのも役割。あと支援のネットワークにも参加する仮設にはいろんな支援団体などがたくさんくるのでそれを調整しあう目的で会議など開く。

生活支援相談員は様々なニーズをキャッチする。直接話しながらその方の問題をききだす。出向いて行くのが特徴。第3者であることもポイント、話しやすい。住民の力を引き出す役。不安の1位が、先が見えないこと。前年より増えているのがショックだった。暮らしている人のニーズが家族で別々の問題を複合的に抱えている。相談員が潰れてしまう心配もあった。具体的につなぐのはサポートする人と繋ぐ人を兼任している人材が多い。ハンドブックはで向いて行こうとJVCAでは考えている。

栗田

ハンドブックいま残はいくつですか？400？あとでテーマ1のかたにも出てもらいますが「次の一歩をどうするか」ですよ。相談員が壊れないようにとかどうしたらいいですか？先が見えないなかで住民のかたの相談をきいていくのは壁だとおもうが？

後藤

役立てたいと思っていただいた方には「ハンドブック」は現在も配布しています。これを使って研修している人とも話しているが「研修疲れ」と言われている。ばーっと話したいとか、いわゆるガス抜きは大事。ないものをつくるニーズにあったプログラム開発が必要。人をあつめて、立ち上げプロデュースしていく力が大切。アタマだけはいけない。スキルでなければ。

栗田

そういうのを地元福島で伝えていくということですね？これからも。

後藤

そうですね。続けます。

吉田恵美子氏（いわきおてんとSUN企業組合 代表）

いわきおてんとSUN企業組合の吉田です。前日も登壇しています。その時はNPO法人ザ・ピープルでした。南相馬が地元とはなかなかいいにくい。いわきならではの課題に向き合って、未来に向けた組織をつくりましたので今日はその話をします。

ザ・ピープルの話は会場の後ろの資料をおとりください。農業者のかたたちと一緒にすることが多かった。避難所への炊き出しなど。市場に出なくなった野菜を買い上げた。農業者が、その先にどうやってこの先農業をしていくのか不安があった。私たちにできる事がないかと考えている所、いわきで有機栽培の綿花を育て、農業をもう一度再生させようと、とりくみを始めたザ・ピープル。昨年までは「いわきオーガニックプロジェクト」、今年からは「ふくしまオーガニックプロジェクト」とバージョンアップしました。30km圏内にソーラーを設置して、置き去りになった牛たちに牧場の水を汲み上げる活動をしていたインディアンビレッジキャンプ。あといわきに観光や視察のかたたちに、どう立ち上がっていかうとしているかをお伝えするスタディツアーをしている。

その3つがタッグを組んで、昨年一年間、「いわきおてんとSUNプロジェクト」を総務省の支援を受けて

事業を進めた。もともとそれぞれが専門分野を持って、震災前は重なる事がなかったメンバーが、震災後の復興をさらに前に進めるために、連携する事が大事。その活動を永続的なものにするために、今年の2月に企業組合という形にしました。

市内15か所、1.5ヘクタール、オーガニックコットンの1年目少ないですが収穫を得ました。わずか300kg、予想よりはるかに少ない収穫。それでも「収穫を得た」と2年目にはずみがついた。今では3ヘクタール、いわき市内だけでなく南相馬にも広野町にも二本松にも、会津美里町でも栽培がひろがっています。

今私が来ているTシャツがサンプルで、明日、届く事になっています。その過程を、ザ・ピープル1団体だけではなく、外部のたくさんの支援をうけてオーガニックコットンの活動ができています。私たちが作ったのはこのうち5%しか入っていないのですがTシャツができ、売ることになりました。その1000枚をNPOのザ・ピープルが全部売るとなった時、そこでゾッとしたんです。古着リサイクルに取り組んできた。その延長線上でオーガニックコットンの栽培、制作が加わった。支えてくださったのはボランティア。1500名を超える。1年目はちいさな人形を売りました。それはNPOでもできる大きさでした。しかし、ここからは、きちんと活動を担保できる組織。企業組合をたちあげ、事業を行っていこうと決めた。

コミュニティ電力事業。30kwで、1ヶ月に20万くらい4月から売電している。この仕組みを作った事で、小川町で新しいコミュニティのエネルギーの転換をと思いました。ソーラーパネルは半田ごてで作れます。スタディツアーは市内にたくさん語り部がいます。またコットンやコミュニティ電力なども体験してもらって、まちのこれからのあり方に触れていただくようにしている。そういったスタディツアーでありたい。これまでに900人きていただきました。「企業組合」というのはなかなか理解していただけない。ザ・ピープルが金儲けに走ったのですか？と聞かれることもあったが、きちんと仕事をもって前に進むためにとった施策。Tシャツ1000枚の在庫を抱える。融資を受け、農家の方たち、首都圏からのボランティアの方たちを巻き込んでいくためにも。

私たちがコットンを栽培し、Tシャツを制作する。農家は食べ物を作っても、なかなか買ってもらえない、市場から締め出された経験をしている。栽培した綿も買ってもらえないとなかなかやっていけない。「この作物をつくっても大丈夫。買いあげるから」といえないといけない。売電も同じ。市民出資という形をとった。いわきの市民だけでなく、首都圏の人にも参加していただきたい。いわきの現状を変えるために、ツアーとして現場をみてもらって応援もしてもらい。悲しい現実だけでなく、私たちが頑張っている事をみていただきたい。収益が出たら、それをお金ではなく、温泉の宿泊券とか、そういった形にしてお返ししていきたい。

このプロジェクトにはいわきの仮設住宅にお住まいのかたも関わっています。檜葉の米作りの方も関わっている。農業は続けたいが米は売れない。であるなら、私たちと一緒に、オーガニックコットンを栽培する。農家のおばちゃんたちと仮設のお母さんが一緒に作業していることで地域のコミュニティが少しずつつながっていく。こういうきっかけを与えてくださったのは外部の方々。都内のJKSKという、被災地の女性と、首都圏の力ある女生とがつながるネットワーク。ここ南相馬でも、「南相馬復興大学」を通してつながって、栽培が始まりました。

栗田

いわきと南相馬は似通ったところもあるかもしれないが、その吉田さんのエネルギーはどこからくるのか？今のいわきはどうか？

吉田

いわきは多くの避難者を受け入れているところ、様々な生活面のトラブルが有る所。ひとりひとりが顔の見える関係をつくるしかないだろう、と思っている。知っている人なら悪いことを言わないだろう。

栗田

なるほど。吉田さんの原点はそこなのですね。分断ができてしまった。つなげるのに NPO がいる…と。

菅野孝明氏（浪江町 ふるさと再生課 復興支援専門員）

浪江町役場、ふるさと再生課・津波被災地対策係で復興支援専門員の菅野と申します。私は川内村の生まれで、東京から戻ってきました。11 月から 8 か月間、浪江町で専門員として働いています。今日は自治体の内部に入っての支援についてのお話をしたい。

おとなりの浪江町の話です。復興計画の第一次計画を抜粋しながら私がどうかかわったかをお伝えします。浪江の復興計画第一次は去年の 10 月に策定されました。103 名の町民を含めた策定委員会によって手造りでつくられました。東が太平洋で西に向かって広がっている町。赤いところが線量が高い地域。東に行くにつれて 0.1 マイクロシーベルトと低くなってく。西に向かって低くなっていく。

4 月に区域の見直しがあり、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に再編。面積比でいうと帰還困難区域が 7、他が 1.5 ずつ。帰還困難区域に 5 0 0 0 人。他に 8 0 0 0 人ずつ、全部で 2 1 0 0 0 人が元々いた人口。JR 常磐線の駅のあたりに居住エリアを作り、そこを拡散していこう、というのが全体のイメージ。私が支援しているのは津波被災地の復興。

津波被災地の計画は 6 0 0 世帯 6 0 0 ヘクタール。帰還の意思についてアンケートをとった。戻るとおっしゃっている方が 4 分の 1、わからないという方が 3 割。もう戻らないという方が 4 割。600 世帯のうち、100 世帯はすでに自立再建している人。わからないという人は、先が見えない事、原発への不安と不信、インフラ復旧への不安、仕事の都合が主だった理由。

こんな状況だが、町はどのように整備していくか、計画段階。海岸沿いは津波の防災林。浜街道の西を大規模な太陽光パネルでの再生可能エネルギーを誘致しようという話がある。住民の要望で移転候補地を 3 箇所選んでいる。これが第一次復興計画。私が入ってさらに具体的にもう少し細かい計画を現在町でつくっている。

復興支援専門員は総務省の復興支援員制度をつかったもので、復興に伴う地域活動という事で、被災地の生活支援や見守り・ケア活動、地域おこしなどで自治体が主体で活用している。浪江の場合は私が 11 月に入る前に、避難生活の支援として山形・千葉に 3 名、町民の場づくりなどで入っている。

私の入り方は特殊。活用しているのは復興支援員の制度だが、協力してくれた団体がある。RCF 復興支援チームが仕組みづくり、連携にあたってふくしま連携復興センターの協力と、人材募集や役場が直接、ではなく、NPO 法人 ETIC が担った。町役場側にまちづくりの判断できる人がいない。コンサルにお願いをしてやってもらう、という形。それを理解して住民対話を出来る人もいなかった。役場内部にもさまざまな課題がある。縦割りとか温度差とか。そういう支援して欲しいということで私は応募した。

このシステムで入りやすかったのはいままでの経験を活かせることに出会えた事。ウェブで、内容が明確だった。東京で 2 0 年いて、建設コンサルと、中学受験で保護者との対話をしていた。地元に戻ってそれを活かす、とターゲットが明確だった。

実際の活動、私が何をしているか。抽象的だが、課題は 5 つ。行ってみないとわからない。状況を把握する。求められている支援は何か。役場が求める事は二つ。ハード整備の専門技術を活かしてほしいということと、住民対話に関わってほしい。どうやらそこに行く前に、内部支援が非常に重要だという事に気づいた。どんな人がどんな事をやっているのかを見ながらやってきた。情報を集める。計画は作ったけどどうやって実際に進めていいかわからない、というのが現場の状況。それを可視化できるものを作りながら、まずは役場の中で対話をしながら、場づくり、話すタイミングを大切にしながら進めている。必要な事は助言する。提案をしていく。

実際に色々作ってきて、具体的にどういう場所がいいのか、どうやったらいいのか。住民との対話が大事

になってくる。大切にしている事はこのような事。今までに色々な過程がある。役場の中にも。いきなり変われと行っても変われない。現状を認めて、大事なのは役割分担の中で、「これ作りました。使ってください」ではなく、「一緒に考えましょう」。作り過ぎない、みんなで議論していく、という事を大事にしている。間違いもある。お互いに許す気持ちを持つことが大事。「役場内部の支援」をメインにやっている。これから住民の方と対話していくにあたって、同じような視点と感じている。

原点として私は何がしたいかを考えた。そのまま東京にいて子どもの教育に携わる事を1年間したが、やはり現場に行きたいという思いがすごく強かった。現場に直接関わってこそ、前に進む、一緒に作っていき、そんな思いで今、活動している。

栗田

アツイですね。建設コンサルの知見を活かして確信を持って入っていると思いますが、地元で浮いていませんか？

菅野

浮いていても良いと思います。やっぱり押し引きだと思います。どこのタイミングで、どう話すべきか、考えながら、進む。手間をかける。人間関係ですから。

(テーマ2後半) テーマ1の登壇者を交えてのディスカッション

栗田

ではここでテーマ1のかたも加わっていただいて…「じゃあどうすればいいのか」を考えたいです。後藤さんはボランティアの・コーディネーター、吉田さんはNPOのコーディネーター、菅野さんは行政のコーディネーター。全体を大きくみると、コーディネーターの存在が大きいことを認識。大きな課題として、ひとつは「南相馬をどう元気にしていくのか」、ただし「元気だ、元気だ」とだけ言っていると、必ず漏れてくる人がいるので、寄り添うだけでは限界な人たちをどうしていうか、二つの大きな課題があると思う。まず近藤さん、たぶん吉田さんの話が参考になる所があったのでは？

近藤

本当に町づくりを担っている、という事だと思う。南相馬の町を考えた時に小高、鹿島、原町みんな事情が違う。私も一市民。ひとつの市をどう考えていくか大きい話だが、ひとりひとりが考えないといけない。何がきっかけでオーガニックコットンから電力までいけるのかききたい。

吉田

町全体を考えるような大きなことを考えていたわけではないのですが3つのNPOがそれぞれ課題認識を持っていて、自分たちのできる事を出来る範囲で進めていた。ここから一步前に、「市民の力で進んだ」という事例が、どうしても必要だった。洋上風力の話が来て、とにかく大企業が東京から来て、大きな事案を示そうという事はあるけれど、市民は何か置き去りにされている気がする。

農業者は待っている感じだが、一般の人たちは「関係ないよ」という感じがする。首都圏ではたぶん、震災が風化している。単独のNPOでは解決する事がすごく難しい。同じ認識の者たちが手を携える事のできる事がある、という気づきが、まずあった。それを一つずつやりながら、お互いの関係性を強め、企業組合という組織体が必要だね、となっていた。自分たちとしては「いわきの未来の町づくり」といっているけど、初めからそれを狙っていたわけではないかもしれない。

栗田

吉田さんのバキューム力？ 気づかないうちに大きなネットワークになっていたと。これからも大変だろうと思うが、吉田さんのような事例は、近藤さんも出会いはありそうですか？

近藤

そうですね。内外関係なく、新しい街にしていくための出会いはあると思います。元に戻っていくのではなくて新しいまちになる。震災があったからできる事。それぞれの専門性。僕は子育て。それぞれの専門職を活かしながら、交渉しながら、外にある物を引っ張ってくるとか、自分にはない知恵を外から借りてくるとか、市民でもできることがありますし、町全体がいい方向に変わるんじゃないかと思う。

栗田

原澤さんは「チームがないじゃないか」といっていました。どうですか？

原澤

過激な事をいいましたが。私もひとつの NPO の理事、相談役をしている。一つ一つの団体は素晴らしいことをやっていると思います。思いもあるし、専門性を活かして個別には進んでいるものもある。でも市全体像がなかなか見えてこないんです。僕だけでなく、患者さんもいう。ぜんぜん見えてこない。つながりが足りないことは、感じている。難しい事ではある。仕事を持った上でアフターファイブに活動している人も。

しかしどこかで全体像をつくる必要があるし、問題解決能力のある専門チームをつくって実行力が大事。話し合う場はいくらでもある。問題意識を共有して外部から呼んでもいい。あくまで問題解決は当事者にしか絶対できない。例えば今日、アフリカで 30 万人が死んでいても、僕たちは何もできない。当事者にしかできない事がある。南相馬にいて、福島にいて、プレイヤーだからできる事がある。

栗田

後藤さん、こういう原澤さんの話からどんなことが言えますか？

後藤

市民団体とか NPO・ボランティアはかなりわがままな世界です。やりたくてやっている思いもあるが、思い込みもある。それをまず、協働のテーブルにつく。そこから同じビジョンに向かって、まさにチームで動くというのは、経験上そううまく行くものではないが、ボランティアの自由さとか、この町をこうしたいという同じパッションをもつ者同士を吸収してくる求心力のあるキーパーソンがいると、見えてくる、ゴールが鮮明になってくる。あまり高すぎるゴールではなくて、一つ一つ登っていける階段のような、目に見える達成・ゴールをしっかり提示できるような人材がいると、そこにパワーは結集していく。そのキーパーソンですかね。

栗田

吉田さん、吉田さんのようなアイデアは誰がだしているのですか？

吉田

実は私は頭の中には何もない、大したものが入っていない。ネットワークに支えられながら、外部の人たち、地域の中の人たち、いろんな方たちとのネットワークのなかからアイデアを頂戴した。課題の認識の仕方も教わった。すべて他の方々とのネットワークの中で得たものだと思っています。

栗田

でも、うっとうしいものもあったでしょう？

吉田

何事もうっとうしいと感じないこの鈍感さがよかったのだと思います（笑）

栗田

近藤さんどうですか？ネットワークで進んでいくという事と、市民のチームがないんだ、という事と、どのような展望がありますか？

近藤

チームでやる難しさ、大きくなり過ぎると動けない歯がゆさもあると思う。みんな共和国は、そんなジレン

マヤモヤモヤを待ってられないから、少数でチームを組んでスピード感をもってやるならいいと思うが、連携しすぎて大きくなって動けなくなるのも難しいので、今はスピード感を優先したい。資金とか教育とか、大学・専門学校を作るとかは、個々で動いて実現するレベルじゃないと思う。外からの力を借りないといけないものもあるので、原澤先生にどんどん動いてもらいたい。一市民として動いていける事がある。

栗田

段階が色々あって、原澤先生の言われる段階にはまだ至っていない、あるいはもっと優先しないといけない事がたくさんある、という主張だと思う。地域によって復興のスピードはちがう。いわきと南相馬は違う。南相馬のペースでいけばいい。たとえば「ジャブジャブ池作りたい」、とかそういう段階なんでしょうね。

近藤

メンバーの中では、「もう支援をお願いするのはやめよう」と思っています。「支援したい」と行って下さる方には素直にうけますが、こちらからは「一緒にやる」というスタンス。支援が必要な部分と自分たちでやる部分とあると思います。

栗田

支援が必要な部分としては、田村さんが言われるようなグレーゾーンの方々も含まれる。浪江町に関しては住民がそこにいないので難しいと思いますが、そのあたり町と社協の関係は浪江の場合はどうですか？

菅野

詳しくはないが役場と社協が連携しないと、と思う。コーディネーターがいて、必要な支援を必要ところに送り込むような人をつけないと、うまく連携できない。そこには外部支援が必要だと思う。

栗田

田村さん、外部支援は足りているんですか？

田村

終息宣言が出て、だいぶ雰囲気が変わった。県内の方の支援は増えたが、県外からの支援は少なくなっていますね。

会場参加者から

栗田

まだ支援が必要だという事はちゃんと発信した方がいい。会場からどうですか？電力の話もありましたが、土湯温泉の池田会長はいかがでしょう？

池田和也（NPO 法人土湯温泉観光まちづくり協議会）

いわきおてんと SUN の事例を聞いて、まちづくりは一筋縄ではなかなかできないと思った。外から見ると闇雲にやっている風に見えなくもないんですが、成功するもの、失敗するものがある。個人的には活気のある活動だと思う。最近の新聞を見ると再生可能エネルギーのマインドが下がっていて、このまま設備投資をしてお金を集めてやっていいのか、心配している。特に太陽光発電は買い取り価格も下がってくるので、十分注意をしたい。私達も地熱発電、バイナリー発電に取り組んでいるが、新聞で騒がれているような大規模なものではない。400kwを計画しているが、6億かかる。イスラエル製の輸入商品なので、円安でどんどん下がるたびに計画が厳しくなる。勉強しがいもある。これからもっと勉強しないといけない。いわきの温泉業界も風評被害でなやんでいる。自分たちで何とか立て直そうと、いわきおてんと SUN 組合に元気をいただいた。

今野聡（臨時災害放送局南相馬ひばリエフエム）

臨時災害のエフエム放送局をやっています、ひばリエフエムといいます。取材も兼ねて参加。問題は難しいと思うが、解決のアイデアが色々あって、議論できることは素晴らしいと思うし、これが何とかまいかたちで復興につながればと思う。放送局としては、こういう取り組みを放送して、できるだけたくさんの人に届けばいいと思う。

おわりに（登壇者からひと言ずつ）

栗田

最後にひと言ずつ。決意や感想を

近藤

ジャブジャブ池の話で締めたいです、クラウドファンディング Ready For というのを使っています。新しいファンドの形で、ここには思いを形にしたい、日本全国のいろんな実現したいプロジェクトがあふれている。私も応援したいプロジェクトに賛同している。そういう思いを形にしたい人、ひとりひとりが、この町をもっとよくしたい、困っている人を助けたい、そういう思いに関心を持って、自ら動く事が出来れば、思いが形になるスピードがどんどん加速すると思う。告知を含めて、今回活用させていただいた。ぜひのぞいてみていただきたい。 <https://readyfor.jp/projects/jabujabu-ike/>

原澤

言いたいことは一つ。それぞれ皆さんの得意分野で、なすべきことをなすべき。医療は自分がなんとかする。皆さんの期待に応えられるかわかりませんが、一生懸命やる。そういう全体があった上で、南相馬という町を、残る事を希望するのであれば、次の世代に投資することは必須で、それは教育だと思う。教育がなければここには子どもは残らないし、集まりもしない。そうなった自治体は必ずなくなる。今は、65歳以上は33%、50歳以上は50%。この先南相馬は、限界自治体になる。それを解決するためには、子どもが集まりたい町にできるかにつけると思っている。

田村

まずはJVCA 後藤さん、ハンドブックありがとうございます。吉田さんには、震災の時に津波にのまれて泥だらけで避難した人への衣類、本当に助かりました。菅野さん、高い線量で分断されて今の南相馬のようになって、街づくりは難しいと思いますが頑張ってください。皆さんに色々ご意見だしていただいて、社協としても、今後ともご協力いただきながら、市立病院の先生にも協力いただいているので、避難されている方も元気にされている。極力、「最低のまずさ」を出さないよう頑張ってください。

後藤

こんな時にだからこそ、ひとづくりだと思う。大人の教育も大事。でもなかなか大人は変わらない。関係性の中でこそ人は変わる。人とのつながりや成功体験を積み上げながら、手をつないでいける人間関係を作って行きたいと思う。そういう場や機会を、作っていく。

吉田

震災の年の3月1日にリサイクルボックスを南相馬に置いてきた。それを回収できずに心残りだったが、それが役に立った。ひとつでも役に立ったという体験がとても嬉しかった。まさにつながったことによってできた。いわきでも、いわき市の社協とつながって、ボランティアセンターもさせていただいている。

「311被災者を支援するいわき連絡協議会」通称「みんぷく」というネットワークも作った。つながって活動することにプラスの意味を見出そうとしている。今日配られている資料の南相馬復興大学の講師の方々も、全員が何らかの形で世話になった方々。こういう方々とつながる事、確かに煩わしさはあるかもしれない。歩調が全然違う人たち歩む難しさはあるかもしれない。でもつながる事のメリットは絶対あると思うので、そこを信じていただければと思う。

菅野

支援ってなんだろうと考えている。必要な支援は時間と共に変わっていく、それを思いながら、常に進んでいきたい。振り返ることを大事にしながら、これからまだまだつづけて行きたい。

栗田

JCN も多くの方に伝えて、つなげていく役割を続けていく決意を新たに、本日のディスカッションを終了させていただきます。ご登壇の方に拍手をお願いします。

<拍手>

テーマ3「つながる」

参加者を交えた意見交換・情報交換

[進行] 尾上 昌毅 氏 (NPO 法人 日本ファシリテーション協会)

※グループディスカッションのため速記不可

閉会

閉会の挨拶

鎌田千瑛美 (一般社団法人ふくしま連携復興センター 事務局長)

私の出身が南相馬の鹿島区。戻ってきたのは2011年4月15日。あの当時、何もない地元を見たとき、「本当にこれは時間がかかる事だ」と思ったことを、昨日のように思い出した。復興支援という活動を、私も微力ながら続けさせていただいている中で、つながる事でしか始められなかった。皆さんとつながれたことが何よりの財産であり、今後の長い長い道のりを考えた時に、お一人お一人と、南相馬や福島や日本のこれからについて考えられるような機会を引き続き継続していく事が大事だと思う。ご協力をいただきながら、こうした機会を継続していきたい。お忙しい中ご参加いただいた皆様に感謝申し上げて、閉会の挨拶とさせていただきます。

以上